明治四十二年十二月二十八日第三種郵便物認可（毎月一回廿日發行）

大正四年四月二十五日發行

婦人衛生雜誌

第三百五號

婦人衛生雜誌

第三百五號目次

豫告

○來月例會は休會致候事

○總會は來五月下旬、麹町區鍋島侯爵邸内に於て擧行の豫定に相成居候得共詳細の儀は改めて御通知可申上候事

大正四年四月

私立大日本婦人衛生會

私立 大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんを皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んといと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつばら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を惹かざるもの丶如くまことに口惜しきことなり因て頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演說談話を乞ひ互に相研究し之を筆記して册子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗槪を敍べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其贊成を仰ぐことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立 大日本婦人衛生會規則摘要

(明治廿二年十二月改正)

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得●第四條　入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す(交付手續卷末に詳なり)入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす●第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる者は役員の協議に依り無會費とすることあるべし●第七條　會員は本會に於て每月發刊する雜誌を無料にて受ることを得●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず●第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の妃殿下に願出るものとす●第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員三十名、書記若干名●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選舉し書記は幹事の推薦に依り會長之を命す但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄雜務を掌る幹事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす●第十三條　臨時指名委員の件●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生ずるときは次點者を以て補缺す●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外每月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め園遊會を開くことあるべし●第十七條　每會學識經驗ある人々に衛生上の講義演說談話を囑託し會員をして隨意聽講せしむるものとす●第十八條　會員は家族の婦女若くは知已の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得(但衣服は總て質素たるべき事)●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁す●第二十條　規則の改正其他重要の件議定のこと●第廿一條　每年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす●第廿四條　會計は一ヶ年每に決算し每年三月總會に報告すべし

支會●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし開後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得●第廿八條　本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其實費を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし

●雜件第三十條　本會は每月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すべし●第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くは書籍物品等を本會に寄贈する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄贈者の姓名及品目を簿册に登錄し尙本會雜誌を以て報告すべし●第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證を送費として別に返信料を添へらるべし(郵券送一割增)●第卅三條　會費は東京府下に限り每月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし振替にて口座番號東京一〇六〇〇番本會事務所宛に振出しあるべし●第卅四條　會員中若し本會の障碍となるべき所爲ある者又は屢〻會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若しくは廢告することあるべし

東京市麴町區富士見町二丁目卅二番地　私立大日本婦人衛生會

講演

歐洲戰爭と帝國海軍

海軍少佐　遠藤格

私が唯今御紹介になりました遠藤少佐でありますが、本日御會合の席で何か海軍に關する話をせよと云ふ御申付ではございます…が元來野生の海軍々人でございまするし、尚ほ且つ斯くの如きお集りの席上で、話をしたと云ふやうな經驗は少しも無いのでございますから、迚も皆樣に徹底するやうなお話は出來得まいと思ひますけれども強ひてとのことでありますからして圖々しく罷出た次第であります。

で申上げる演題は、此の度の歐洲戰爭と我帝國海軍と云ふ意味で御答をして置きましたが、本日伺ひまするところでは約一時間の內に話せと云ふことでありまして、それでは一寸時間が足りませぬので、茲に假に改めまして唯今度の戰爭中に起りました事柄の內、皆樣に御參考になるべき點だけを二三申述べ責を塞がうと考へます。

先づ第一に、此の戰爭中皆樣の御耳に一番能く殘つて居る事は東洋及び印度洋方面に於ける獨逸巡洋艦「エムデン」の行動であらうと思ひます、でありますから先づ最初に此「エムデン」に就きまして　私共が非常に感じた事を並べて、さうして其の中から若干か教訓を見出して、皆樣と之をお分かち致したいと存じます、私の此の「ノートブック」に據りまして「エムデン」の行動を極く簡單に申述べて見まするとに「圖を指し日本、膠州灣、新たに占領せし南洋諸島、及新嘉坡、印度洋等を摘示す」まだ日本と戰爭にならぬ中、八月六日の頃「エムデン」は膠州灣を出て、

而して種子島と奄美大島との間を抜けて南東の方へ下がり、今度日本で占領した「マリアナ」群島の附近に於きまして、其の前から南洋方面に居りました、「シャルホルスト」「グナイゼナウ」等の獨逸東洋艦隊の主力と會合し、相引連れて、南西の方へ下がり、八月二十三日頃即ち日本が此の戰爭に加入した當時は、ボルネオの東にあるセレベスの東の方に參りまして、此處で是等の艦隊は愈々「エムデン」、御前は印度洋を荒らせ』、『己れは太平洋を荒らす』と言ふやうな風に分れたのであります、其の後の「エムデン」の行動を申上げますれば、此のセレベスの東のマカッサル海峽や、爪哇島の東の方の水道から次第に南に下がり、爪哇の南方丁度百浬位を隔てゝ漸次西の方に航進し、九月十日頃には此のスマトラ島の西方、海上にあつて機を窺つて居りました、そして御承知の通り九月十四五日頃からベンガル灣内で非常に荒れ廻はり商船十數隻を擊沈して、其の姿を晦まして仕舞ました、けれども案外遠くには逃げませぬで南京米で有名な此の蘭貢沖で荒れ、再び此處で商船を沈め、引返して印度の東海岸にあるマドラスと云ふ處や錫蘭島附近に顯はれ、更に印度洋の眞正中にあるミンコイと云ふ島の附近で又多數の商船を沈め、斯くして九月の下旬には遠く南に下がりチーゴガルシアと云ふ島、此の附近に暫く影を潛めそれから再び北に上り、又もとのミンコイ島の附近で商船を沈め、其後逆戻りをして東へ出て御承知の通り彼南では露西亞の「ゼムチウグ」と云ふ艦を擊沈し、それから南に下がり十月下旬にはコヽス島附近方面に居つて、なか〳〵捕へることが出來なかつたのであります、恰度此の頃に英國では濠太剌利亞、ニウゼーランドの方面から陸軍の運送船數十艘を本國に送らうと云ふ場合でありまして、十一月七八日頃にはココス島の附近にさしかゝつたのでありますそして十一月の八日の夜半には偶然にも此の陸軍を護送して居ります、日本英吉利の艦隊と「エムデン」とは僅か十浬程で擦れ違つて居つたので、是がもう

五分か十分も遲くありますれば恐らく多數の陸軍は「エムデン」の爲に損害を受けたかも知れなかつたのですが、天佑は我軍に在つて當時の新聞紙に已に御承知の如く翌日「エムデン」はココス島で敢無き最期を遂ぐるやうになつたのであります、此事柄の中で特に詳しく皆さんにお話致したいと思ふ事は「エムデン」が彼南の港で「ゼムチウグ」を沈めた行懸りであります。

私の記錄に依りますると十月二十八日「エムデン」が彼南港に出現した當時「ゼムチウグ」は何う云ふ狀態であつたかと申せば、何分浦鹽以來こき使つて居つた爲めに、汽罐は傷み機械は磨損と云ふやうな姿で、健康狀態の頗る不良なる艦でありました、そして之をちつとも直さずに此の印度洋方面に追使ひました結果として機械はちつとも動かないやうな風になりまして已むを得ず彼南に入つて頻に機械を修理して居つたのであります、又「エムデン」の方は暫く姿を見せないで居りましたが、先程申上げたやうに飛んでもないミンコイと云ふ處で一寸姿を見せたきりでありますからして此の新嘉坡方面に在る英吉利や佛蘭西の先生方は茫然して居るに違ひない、此の際茫然りした處に乘じて酷い目に遭はして行らうと斯う云ふ考を有つたものでせう、元來「エムデン」と云ふ艦は煙突が三本しか無いのでありますが、一本「ズック」で煙突の格好に拵へまして、恰度英吉利の「ヤーマス」と云ふ四本煙突の艦に似せまして、十月二十八日の夜の明けるか明けない裡に彼南に押寄せて參りました、さうして其處に居る佛蘭西の驅逐艦等の間を徐ろ〱潛り込んで行きましたので「ゼチウグ」の水兵が不思議に思つて喇叭のやうな「メガホン」と云ふもので、『オイ〱何船だ』と問ふたさうすると『私は「ヤーマス」である、ちよつと入つて來たのだからしてお前の艦の隣りへ錨を投つ』と云ふ答でありました、ところが能く水兵が氣を付けて見ますと煙突の一番お終ひの奴がぐら〱して居ります、そこで是は不思議である僞せ物に相違ない

と云ふので周章て士官に屆ける、士官は高い所に登つて見ますると、確かに「エムデン」でありますから直に戰鬪準備を命じて彈丸を打出さうとして居る間にもう僅かの距離に近づきました「エムデン」の方では水雷を發射しまして、「ゼムチウグ」が一彈打出す中には向ふの水雷が中つて何うも斯うも成らぬと云ふ運命に陷つたのであります、それと同時に「エムデン」は尚ほ其の殘骸に向つて猛烈なる砲擊を加へ且つ附近の艦船をも砲擊して悠然と引上げたのですそれから茲にもう一つ事實ならば誠に殘念な事がある、噂によると「ゼムチウグ」艦長は、露西亞でも有名な人でありましたが此時に艦の中に居りませぬで陸上の「ホテル」にでんぐりかへつて居つたさうであります、是まで誠に謹直な人であつたのですけれども、此「ゼムチウグ」艦長の夫人と申す方は、何時でも艦長が外國に行くと其の跡を追驅けて何處までも〳〵附いて行く癖の有る人でありまして、此の戰爭となつてからも此夫人は「ゼムチウグ」が香港に行けば其夫人も香港に行き、新嘉坡に行けば又新嘉坡まで行く、今又彼南に參りました際にはもう二三日お先きに行つて居つたと云ふことであります、是が爲に「ゼムチウグ」艦長は上陸して「ホテル」にでんぐりかへつて居つたと云ふやうな次第である、是は誠に笑ふべきやうな話ではありまするが、油斷のある人は・・・戰爭は遠い西の方で、此方の方は太平安穩である、何も戰のやうな格好をして居らなくても宜いと云ふやうに考へるでせう從つてそれ等の人は此の艦長が彼南で斯くの如くでんぐりかへつて居つたのも當前であるとするでせうが、凡そ國を賭して戰をして居る際にはちつとも油斷や隙があつてはならぬので少しの隙があると直ぐ其處に付込まれる詰り此の「ゼムチウグ」艦長も斯の如き油斷をやつたが爲に永久に拭ふことの出來ない汚名を戰爭史上に止めた次第であります、私共は此事柄に依つて油斷大敵の實例を明かに認めたのであります、何んな場合でも『まさかに斯んな事はあるまい』と思ふやうな考で

居りますと、人間の知識は、神様でない以上尚ほ至らぬ所が必ずあります、其到らぬ隙に乘じて偉らい人間は何事をも企て得るのであるから造次顚沛も油斷大敵と云ふことを忘れてはならぬ駄目に駄目を押すべしと云ふ念が愈々深くなつたのであります、今露西亞の婦人のお話を致しました序に英吉利の婦人に付てちよつと申上げますが英吉利の婦人は戰が始まつて以來一向選擧權と云ふやうな八ケましい政權運動等を行らなくなりました、さうして近頃は、巴板額流の婦人が軍隊を組織しまして、目下は五百人の大隊二つから成つて居る聯隊を拵へて近日是が佛蘭西のアーブル港に上陸して聯合軍の後方勤務に就くと云ふやうな事を聞いて居りますが、是と前の露西亞の婦人との性格の差を考へて見まするど此間に言ふに言はれぬ敎訓を示すものと信ずるのであります。

それから「エムデン」に就てもう一つ申します、「エムデン」が新聞に傳へられた通りミンコイ島附近或はマラッカ海峽附近、其の他に於て無數の商船を沈めた理由は何處にあるかと申しまするど、是は獨逸海軍の大體の戰略から來て居るのでありまして、今度戰を始めますに就て、獨逸は何う云ふ考を有つて居つたかと云ふのに……もと／＼獨逸の海軍は英吉利の海軍の約七割程しかありませぬので、正々堂々と向つたのでは到底戰さにならぬのであります、それ故英吉利の一番痛い處を衝いて其の方へ幾何か手を分けさせ殘の兵力を自分と大差ないやうにしてそれで以て戰さを正々堂々とやる……斯う云ふ謀を執りました、これを具體的に申しまするど、英吉利と云ふ國は御承知の通り商工業の發達した國でありまして食料品其他の需要品は自國のものでは間に合はない間に合はぬので一方は亞米利加から大西洋を突つ切つて入るのと、それから自分の領土である所の印度濠太利亞の方面から紅海地中海を通つて本國に行くのと此二つが所謂英吉利の生命路であります、此の路を斷つて仕舞へば英吉利の生命路は無くなるの

であるから、此の一番痛い所を突ついてやれば英吉利、本國は默止つて居らない、必ず多數の海軍を向けて之が征伐に出掛けるだらう、其の出掛けた留守に、本國の兵力の少なくなつた折りに、正々堂々と戰をやらうと云ふのが獨逸の戰さのやり方であります、さう云ふ戰略の上から「エムデン」などが諸方を荒し廻つたと推斷するので即ち斯る事は私共此壇上で饒舌りますと誠に容易いやうでありますが之を實際成し遂げますのは、軍艦と兵隊とでやるのでありますから唯無暗に驅け廻つても何の效もありませぬ中々難ケ敷ことで何時何處で何うやれば一番痛いかと云ふ事を能く調査した上でなければならぬのであります(太平洋印度洋各國汽船交通圖を指す)

此處に掲げてあるのは獨逸海軍で使用した汽船交通圖でありますが、之を能く〱調べて見ると獨逸は一昨々年戰を行る積りで總ての準備をやつて居りましたことが分明ります此圖は一昨々年即ち千九百十二年に出來たのですが、英吉利の商船は何處をどう通つてどの道を一月の何日頃、何等の方へ通るとかそれから和蘭の船はどう通る、佛蘭西の船はどう通ると云ふ風にちやんと國別に調べた圖であります、此方の方が英吉利の圖、此方の方は其他の諸國の圖で此の調べたものを専門家の眼から見ると此の圖一枚拵へるにも一年半はかゝるのであります、處が此圖の下に書いてあるのを見ると千九百十一年末調となつて居ります、隨つて僅かの日數で調製したものに相違ありませぬ、何故に斯んなに早く出來たかと申せば、獨逸に於ける各省の分擔事項は明かになつて居り、又省内の各部局で扱ふ事柄も截然と區劃されてお互に二重の仕事をしない又、さうかと言つて隣り合つた部局が疏通しないと云ふやうな事はありませぬ、皆能く疏通して居ります、之を日本に比べて見ますと數多の官省が同一事項を二重にも三重にもやつて居る傾向がありまして勞力の割合に成績が擧りませぬ、然るに獨逸では之をやりませぬ、萬般の國内の組織がきちんと出來て、銘々受持の事だけ

やるのでありますから、誠に短時間で部分的に出來上ります此の圖の如きも各省で部分的に調べられ一番お終ひにそれが海軍省に寄こされて物に成ると云ふやうな遣り方で吾々の理想と合致して誠に好い仕方であります、流石に獨逸は醫者の本家本元だけありまして、最も組織的に、結合的に萬事が準備されて居つたので、殊に千九百十二年には戰をやると云ふ戰爭準備の方面はより以上に整備されて居つたことが分りました、實に獨逸國の準備と云ふ事に對しては敵國ではありますが讚辭を惜まぬ次第であります。

次に各國軍人の精神上の事に就て申述べます、人間の精神狀態と云ふものは將に死に就かうと云ふ時分に一番能く表はれるものでありますからして、海軍の艦船の沈む一瞬間に於ける兵員の樣子を述べまして、それから幾何かの敎訓を見出さうと思ひます、此の戰爭中各方面の海戰で敵味方共多數の艦船を失ふて居ります、先づ日本で一番著しいのは軍艦高千穗の爆沈であります、是は其の當時海軍省の公報として十月十九日に發表致されました通り軍艦高千穗は膠州灣外哨戒中敵の水雷の爲に沈沒したのでありますが、其の當時、第二艦隊司令長官加藤中將の報告を讀上げますと、「軍艦高千穗沈沒の當時附近の海面一帶に粉碎せる浮流木片の無數なりしこと約二十海里を隔つる勞山港より其爆發の大煙光を望見し得たること及生存者僅に三名なりしこと竝に該生存者の言より判斷すれば其沈沒は敵驅逐艦「エス」九十號の發射せる魚形水雷を受けて延いて火藥庫等の激烈なる爆發を誘起したるに因るものと信ぜらる、又當時艦長の艦橋附近に在りしことは其負傷の狀態及服裝等に由りて明かなり、生存者の言に據れば同艦の沈沒後波間に浮漂せる數名の艦員は「君が代」を奉唱し又は「此處は御國の何百里」の軍歌を唱へ居たりと以つて其の如何に專念君國を思ひ從容死に就きしかを察知するに足るべく、本職は深く艦員が皇國軍人の本領を發揮したるを喜ぶと同時に益々壯烈な

る其の戰死を痛惜して斷腸の念に耐へざるなり」斯う云ふ報告がありました、さうして當時此の光景を見た人の話を聞きまするど實に悲慘なもので此の慘況に處して泰然と死を待ちつゝありました皇國軍人の精神は實に立派なもので龜鑑とするに足るとの事でありました、之に能く似寄りました話が外國にもあります、それは時日は一寸忘れましたが、昨年末北海で獨逸の水雷の爲に爆沈した英吉利の一軍艦が將に沈まんとする時艦員は海中に漂ひながら愛國の軍歌を歌ひつゝ沈んださうである尚又昨年の十二月の八日フォークランドの海戰で沈んだ獨艦「シャルホルスト」「グナイゼナウ」にも之に似寄つた事があります、其の話を申上げますれば「グナイゼナウ」號と云ふ艦が沈沒する間際には彈丸は悉く打盡して仕舞つて唯の一發も殘つて居らぬ、艦員は艦の上に集まり皆愛國の歌を合唱しながら艦と運命を共にしたさうであります、又「シャルンホルスト」と云ふのは東洋艦隊の旗艦でありましたが、此の艦隊の司令長官なるフォンスピー中將には子供が二人ありまして何れも海軍士官で一人は阿父さんの乘艦なる「シャルンホルスト」に乘つて居りもう一人は「グナイゼナウ」に乘つて居りました所が是等が皆一緒に擊沈されたので、親子三人共悉く君國の爲立派な最期を遂げたのであります、卽ち日露戰爭に於ける帝國陸軍に取つて見ますれば乃木將軍父子の事に似て居る處があるやうに思はれます斯くの如く日本でも獨逸でも英吉利でも洋の東西を問はず同じやうな美談が湧いて來ました、で私共は是まで各方面からの戰報を見ます每に其中には此の種の事柄を折々見出しまして其の都度非常に感嘆して居つたのでありましたが、皆樣も此事柄に就ては御同感だらうと思ひますそして何んとなく此等の事は詩的に思はれるのでありますけれども熟々考へて見ると今は……單に東西相通ずる詩的事項である、美談であると云ふやうに褒めて居る時でない……と云ふ事に考へが及びます、卽ち此事柄の半面には大和魂の優越と云ふこと

を考へる上に一段不安の念が浮ぶのであります是迄我々は君國の爲に忠死した軍人の美談がある毎に是は大和魂が爲さしめたのである、是が日本魂である我等も斯くあるべしと云ふやうに誇つて來たのでありますけれども斯んな風に此大和魂の僞物が英吉利にも獨逸にも佛蘭西にも方々にぞろ〳〵湧いて來たので今や甚だ心外に堪へない次第です、固より吾々の有つて居る大和魂は本當の「ダイヤモンド」でありますさうして彼等の有つて居ますのは人造金剛石＝僞せ「ダイヤモンド」でありますが、此僞せ「ダイヤモンド」も似せやうが段々上手になりましたので、光りが段々似寄つて來る、堅固さも似寄つて來ると云ふのでありますから、大和魂と此の僞物との戰のときに使ひます、相場を聞いて見ますと、まさかの時には僞せだらうが、本物だらうが其の效能は唯堅さの一點に係かるのでありまして錦の袋に入つて居る本物も又木綿の袋に入つて居る僞物でも唯其眞價は強さにある丈けです、で今申上げたやうに歐羅巴人にも日本固有の大和魂に似寄つた物を製造し、さうして吾々の壘を摩して居ります、斯う云ふ事を考へて見ると將來の戰で吾々は大和魂と云ふものを當てにして居る譯には行かぬやうになつて參りました從つて何か是以上の物を見付けて彼等に對抗するのでなければ到底將來の戰爭は覺束ないと考へるのであります。今や日本に於ける時代思潮は段々物質的に流れ又情の方面は露骨的になつて參り爲めに兒童敎育にも屢々其の弊が認めらるゝのであります、斯くして近き將來に於ける國民の風潮、我國民思想の風潮の上に思ひ及ぼすときは身體中に粟立つやうな氣が致します、元來私共の學校で敎育を受けました時代には世間が今日の如く忙がしくありませぬ、でしたから底面たるべき學識は狹いのでありましたが、高さたる精神だけは立派に授けられて立體的の敎育を受けて來ましたが、今日の時勢では學校で授くべき科學の方面が大となりましたが爲其の精神的方面を面倒臭く時間を長くやつて居る譯には行かな

くなつたかの感があります教育としては科學の方面が該博になると共に精神の方も一層高くならねばならぬのでありますが、此頃の學校に於ける教へ方は平面的で私の此處に持つて居る風呂敷と同じ様に該博にはなつて來たのでありますが高さがなく從つて厚さがなく即ち中心がなくなつたかのやうに私共には考へられます、で皆様方が御自身で眞中に立派な精神上の高さを有たなければ駄目である、重ねて申せば學校で授けられました教育＝それと自己が家庭で修養される精神と此二つを常に兩立出來るやうにして置かれたならば、最も偉大なる效果を得らるるだらうと、婆心ながら一言申添へます私が日露戰爭出征中に或新聞を見ました所が某文學者夫人の詠歌が掲げられてありまして其の歌意は誠に感情の露骨的な且つ非國民的なもので其文句を聞いただけでも忌まはしい位でありました然るに此の夫人の同一主義の詠歌は戰後續々各種の新聞雜誌に入賞するやうに時代思潮が轉化して居りますつまりそんな物を賞に入るゝのであるから世間の者はさう云ふ事を定めし尊重して居るのだらうと思ひます、之に由つて觀ると今申上げた通りの思潮が段々蔓延つて來たのですから、さう云ふ方が母となり第二第三の國民が斯う云ふ思潮で養成されたならば是からの國民の精神は何うなる事か前申上げた僞せ大和魂僞「ダイヤモンド」にも劣るものが大分出やせぬかと云ふ心配がありますので單に科學的の方面ばかりでなしに精神界に力を盡すと云ふ事に御傾注あられむことを希望致します。

次に最近新聞で御承知の「ダーダ子ル」方面の事を申上げて此演壇を下りたいと存じます。

ダーダ子ルス攻撃を御話致しますが、(圖を指す)此ダーダ子ルスと申しますのは御承知の通り亞細亞土耳其と歐羅巴土耳其との間に在る細長い水道で其の内一番南に寄つて居る部分であります、其の長さは約五十浬ばかりであります、そしてダーダ子ルスの要塞と申すのはこの兩岸に設けられた幾十の砲臺の

一圖を申すのであります、此處はもとヘレスポンドの海峽と申して居りましたのを後にダーダチルスと云ふ名を付けましたので、此ダーダチルスの一番西南に近い處——此圖で見ますと此處の山の上にダルダヌスと云ふ處があります、其の昔今は土耳其のアドリヤノープルの邊にサモスラスと云ふ所がありまして、希臘神話によればチウス並プレアツトエレクトラと云ふ神様に數人の御子樣がありまして、其内一番可愛い御方がダルダヌスと云ふ名前でありました、其人がどうかして亞細亞の方へ國を建てたいと思つてやつて參りましたところが、歐羅巴と亞細亞との間に瀬戸があるので渡れない、そこで段々半島を傳はりてキリツドバール地方へやつて來て、此處で色々工夫して革を以つて袋のやうな船を拵へて之に乘つてトロイ地方に渡り、ダーダヌスと云ふ國を拵へたのであります、之に基因して此所をばダルダチルスと云ふやうになり此處には今でもダーダヌスと云ふ町の名が遺つて居ります、で此海峽の長サは全體で四十七浬ありますが、其の中此圖に表はれて居りますのは二十浬程であります、さうして此港の口は二浬程ありまして＝二浬と申しますとちよつとまあニコライ堂から愛宕山位の距離であります＝此邊の山地は海面を拔くこと五百尺乃至七百尺、此方は、千尺位の山でありまして、處々に風車が何かのやうな物が澤山見えます、又處々に城趾の壞はれたのが見えます、それから此邊の水の深サは一寸此講堂の高サの十倍位あります、さてダーダチルス攻擊の由來から申しますれば昨年八月初めの頃、獨逸巡洋戰艦「ゲーベン」巡洋艦「プレスラウ」と云ふ艦が英吉利艦隊に追詰められて伊太利のメッシーナに入り更にアドリヤ海に入らうとした、そこを見付けられたものですから、此ダーダチルスの口からコンスタンチノープルの方に逃げ込みました、英吉利の艦が其後を追駆けて行つて二三隻で之を監視して居りましたが十月二十九日に土耳其は獨逸側に立つて開戰し、黑海の中の露西亞のオデッサ港を砲擊したの

であります、そこで此海峽に頑張つて居りました英佛の艦隊は十一月の三日か四日の頃砲臺攻擊を始めたのであります、それから度々砲擊は致しましたが今回は二月十八日十九日に猛烈な攻擊を始めまして二十五、二十六日まで續けましたが天氣が惡ひので再び休み、其後三月一日から始め尙ほ今日まで續けて居ります、之に從事して居ります艦は戰鬪艦以上のものが十七隻で、其の外驅逐艦が三十餘隻、巡洋艦が約十隻程で、之を加へ合して見ると目下日本海軍の有して居る主力よりは餘程尨大であります、英吉利の方では、日本の新らしく出來かゝつて居ります戰艦、匹敵する「クヰンエリサベス」それから金剛比叡のやうな型で大砲が少し小さい艦でありますが「インフレキシブル」、薩摩と同じ艦で「アガメンムノン」其の外香取型、朝日型などの艦を加へまして英吉利の艦が十隻前のとで十三隻になります又佛蘭西の艦は朝日に似て居る「シヤールマニユ」、「ゴロア、シユフラン」等で、目下の樣子は何うであるか

と申しまするに初め此ダーダ子ルスの口にある、右側のクムカレツシ、オルハニエンタピヤ、左側のヘレス、セドルバールこの四つの砲臺に對して、朝から晚まで猛烈なる砲擊を加へまして、其の方法は最新式の艦は遠くの方から打ちます、それから舊式の艦は近くから擊ちます、遠くから擊つた砲彈に由つて砲臺が稍々沈默しました時に舊式の小さい艦は接近して猛烈に砲擊致しました爲に此入口の砲臺は二十五六日に全部破壞されて、土耳其兵は中央要塞地に向つて退却しました、そこで英佛諸艦からは直ちに陸戰隊を上陸さして遺憾なく破壞し、復び使へないやうに致し又片方では掃海隊を編成致しまして峽口から掃海を致しました、で目下は此ダーダヌス邊まで掃海を終つて居ります、本日着きました電信に依りますと掃海の區域は二日の日に恰度(圖を指す)此處まで參つて居ります、さうして最新式艦の大砲の利きます距離は(「ニコライ」堂より羽田穴森の邊迄)此圖上ではちよつと是だけの長さまで利くので

あります(二萬米突)此ダーダチルスの砲臺は全部艦隊からの砲彈に依て破壞されたのであります、誠に戰さの話は無趣味で面白くありませぬが此中から理窟を一寸引ずり出して見ると昔から海岸の要塞に對して海軍だけで之を陷れた例は無いのでありますが今回に限つて海軍の手だけで斯樣に砲臺を陷落さして仕舞つたと云ふのは一寸考へて見まするとに誠に不可思議のやうでありますが、仔細に其內容を調査して見ますれば是等の砲臺と云ふものは總て時代遲れの兵器を使つて居ります、其砲の如きも二十八珊、三十珊等中々大きいのでありますけれども砲其ものが十九世紀の砲が多いやうであります、であるが爲に大砲の效力が非常に惡いのである、即ち軍艦から擊つのより砲臺から擊方が效が無い、例て申せば恰度宮本武藏や荒木又右衛門などの御連中が鎗刀を振廻はして戰つて居る處に近衛聯隊の一小隊が現はれてそれに向へば荒木又右衛門でも誰れでも適ひませぬと同じやうに艦隊から打たれるのを手を拱ぬいて居るばかりであります、斯やうに詰らぬ理由ではありますが、此の理窟からして國防軍備と云ふものは此の日進月歩の世界の趨勢に伴ふて行きませぬければ何の役にも立たぬのであると云ふ事を事實の上で能く證明して居ると謂はねばなりませぬ、之を我海軍の造艦政策に對比しても同樣の結論となるのであります、即ち日本の海軍と云ふものは古船ばかりで良い船は指を屈する程しかありませぬ、何故斯んな風になつたかと申しまするとそれは吾々の仲間に惡るい奴が居つたのさ、それからもう一つは國民一般の國防に關する觀念が幼稚であつて軍備と云ふものを政治屋の道具に使はれても平氣である、何時でも政爭の具に供せられた爲に此三四年は陸海軍共に何等新らしい設備を行ることが出來ませぬ、從つて目下の海軍は發育不十分榮養不良と云ふやうな樣子が見えます政變は病氣である此病氣＝大病には三度罹つて居る譯で、發育不十分と云ふ上に三度も病氣を行れば益々惡るくなる、又經費節減の爲に艦隊を動

かす石炭にまで喰入つて居ります、是が爲に艦隊其物の養生が出來ぬのであります、それで一口に言へば榮養不良發育不十分であると申さねばなりませぬ序に金の事なぞを申上げて濟みませぬが日本の第一第二艦隊等が何れだけの行動費を要して居るかと申せば是は各國に較べて平均すると、一番額が少ないので排水量一噸に割當てますればたつた七圓であります、ところで英吉利は幾ら費つて居るかと云ふと一噸に付約貳拾圓、亞米利加が貳拾圓、佛蘭西が拾六圓、獨逸が貳拾九圓、伊太利が貳拾圓、墺地利が貳拾貳圓五拾錢是だけの割で費つて居るのは、日本は半分にも足らない、たつた七圓である、此の結果は、決して笑ふやうな事ではない、誠に心配な事でありまして、寧ろ新らしい艦を拵へるよりも此の艦隊の活動の方面に力を注いで艦隊の能率を良好にすると云ふ事が目下の急務であると謂ひたくなります手近な例を以て申しませう昨年十一月一日南米智利沖に於ける英獨海戰には兩軍共略互格の勢力でありました然るに英國の此の戰に臨んだ艦船は「グラスゴー」一隻が遁走した外は全滅と云ふありさまで之に反し獨逸の方は一隻も沈みは致しませぬ、斯やうな破目に立至りましたのは英艦の此等は總て豫備艦卽ち行動費を多大に節減した艦であるからと云ふことに基いてます。

元來海軍々人としては英獨共何れ劣らぬ勇者であります、然るに此等獨艦は總て多大の行動費をかけて練達の域にありまして殊に「シャルンホルスト」「グナイゼナウ」の如きは前年度前々年度に射擊技量に於て「カイゼル、プライス」を受けて居ります又英國海軍の訓練された艦は世界一の射擊技量があるのでありますけれども此の豫備艦は訓練が足りませぬで獨艦に比し技量が劣つた爲にとう〳〵全滅に陷つた次第であります卽ち此の行動費の大小は直接艦隊の力量を左右するものであるといふことに御留意を願ひ度い。

以上申上げた事は理窟やら感想やらで誠に辻褄が合

つて居りませぬ……が、其の內から皆樣が僅少なりとも益を得られましたならば、私の非常に欣幸とするところであります、長々と駄辯を振ひ皆樣の御淸聽を煩はしましたのは洵に慙愧の至りに堪ませぬ。

叢談

衞生と死

根律　𣳾菅

衞生と云ふのは人間の健康を保持し、更にこれを增進する道を講ずることであると申します。然しこれは今日の定義であつて、昔は衞生と云へば直ちに延命長壽、不老不死の法を工夫することでありました。つまり死にたくないと云ふ生物の本性に基づき、長生したいと云ふ慾望より始まつたことであります。

然るに此世に人有つてより以來幾萬年たつたか分からぬ、又幾億萬人生れて來たか分かりませんが、未だ曾て不死の人あることを聞かぬのであります。今現在生きて居る吾々の中には死なぬ人があるかも知れませぬが、先づ百中百、千人の內千人は確かに死ぬるものと謂ふて差支はありますまい。そこになりますと、昔の人は剛氣なもので、何等かの法に由て死なぬことも出來やうと考へたものであります。然ればこそ不死の藥を蓬萊山に求め、又は自ら不死の藥を鍊り合はせ、或は種々の仙法を修業する人もあつた譯であります。それが段々知識が進み、益々明かに自己を知るに至つて、人は死すべきもの也と云ふことが愈々確かになつて來まして、今日では衞生は不死の法を講ずる學問であるとは云はなくなつた只健康を保持し、これを增進する方法であると云ふやうに穩な定義を下すやうになつたのであります。それで衞生は勿論不死を期するものではないが、又敢て延命長壽を以て直接の目的とするものでもありませんが、健康を保持し、これを增進することが出

來れば、自然にその結果として人間の壽命が延びるわけであります、而して實際これに由て人間の壽命が延びて參りました。その證據として一例を擧げて見ますならばエングランドでは三十五六年前までは一千人に付いて二十二人以上の死亡率でありましたが、近年になりましては都會では十九人以下になつたと云ふことであります。この差は一見した所では甚だ僅かなやうでありますが、實際に於ては十二萬の人命の儉約を意味して居る、言ひ換へれば十二萬人の人間の生命が一年づゝ延びたわけになり、百萬人の男の兒全體で百四十三萬九千一百三十九年の年齡を儲けることゝなる、而かもこの所得の三分の二は二十五歲から六十四歲までの壯年の人の分になつて居りますから、生活力も生殖力も充實してゐる年齡で、將來の爲には莫大な關係を有つて居ります。これに依て見ましても醫術、衞生法の進步は僅かなやうでも如何に廣大なる效果を齎らすものであるかゞ分るであらうと思ひます。獨逸に於ても窒扶斯や結核の豫防撲滅法に力を注いだ結果、近年に至つて實に目覺ましき良成績を擧げたことは有名なもので、何の位獨逸人の壽命を延べたかわかりません若し我國に於ても只結核だけでも十分豫防することが出來たならば、吾々日本人の壽命も平均七十歲に達することは敢て難くあるまいと思ふのでありますこれは單に傳染病、特に結核一つを防ぎ得るだけでも斯うでありますから、一般に衞生が行はれましたならば、今日だけの智識の程度でも餘程國民の壽命の延びることは確かでありますが、更に醫術衞生學の進步は駸々として日に新たなるの有樣でありますから、一般に衞生思想が普及されて、これが實行されるやうになりましたならば、吾々の壽命は確かに百年を超ゆることは疑ないと思ひます。

斯く申しました所で、なるほど醫術衞生が進步してそれが實際一般に行はれるやうになれば吾等は百歲の齡を保つに至るであらうが、更に百五十歲に達することが出來るでありませうか。これも到底急には

六ケ敷いが、出來得る望はあります。現に英國の百姓で百五十二歳まで活きた人がありますから、少なくとも此の年齢或はもう少し高年に達し得る望はあるのであります。然し更に慾を張つて二百年、二百五十年乃至三百年と云ふやうに、つまり無限に活きることは出來ないものであらうかと云ふことになりますと、今日までの經驗では出來ないと言はなければなりません。然し何故出來ないかと云ふ理由になりますと、その答は容易なやうで實は容易でないのであります。長命をしても何れは老衰するから死ななければならぬとか、生あれば死ありとか云ふのは皆只經驗上から來た言葉で、何故に老衰せざるべからざるか、何故に生あれば死あらざるべからざるかと云ふ理窟になりますと一寸解釋がつかないのであります。

一體生物は死すべき運命のものかと云ふに、そうも云ひ兼ねるのであります。と云ふのは、極下等の生物、即ち滴蟲と云ふやうな唯一個の細胞で出來て居るものに就ては、吾々の所謂死と云ふ現象は認められないのであります。それは何う云ふ譯かと申しますと、斯樣な只一つの細胞が一個の生體となつて居るものでは、繁殖致しますのが誠に簡單で、一個の飴の塊のやうな身體がちぎれて二個となる、而してこの二つのものは全く同樣で、同年齢でありますから、何方が母か娘か區別がありません。この二個が又各々ちぎれて四個となり八個となり十六個となると云ふ具合に何處までも分かれて參ります。それで其の祖先以來連綿として一系を保ち、而かも初代の滴蟲も十代目の滴蟲も同一身體であります。斯の如くなれば吾々の普通死と稱するやうな現象は此處は認められません、第一に死んだと云ふのには屍骸が殘らなければなりますまいが、單細胞體は右の次第でありますから屍體と云ふものはない。人が煮るとか毒物を注ぐとかして殺した場合は別でありますが自然に死ぬと云ふことはないのであります。

是を以て觀ますると生物は必ずしも死なければな

らぬ運命を有つてゐるものではありません。扨て然らば同じく細胞の集團たる凡ての動物、從つて又吾吾人間の身體とても死なければならぬと云ふ筈は無さそうに思はれるのであります。然るに實際何れの生物でも二個以上の細胞から出來てゐるもの、卽ち多細胞體の生物は、動物に限らず植物でも悉く死ぬる、壽命の長短は種々であるが早晩必ず死ぬると云ふことは事實であります。動物の中では鷲は百年の生を保ち、鯉も百年位いきると申します。又鴉、鵠、象及び鯨なども三百年或は四百年いきたものがあると申しますが、これは誰も確かに證明したわけでありませんから頗る疑はしいのであります。更に植物になりますと、まだ〱長生のものがあります例へばアテンには西暦紀元前一百年も前に植ゑられた橄欖樹があると云ふことであります、卽ち二千年以上の壽命を保つて居る。尙ほ水松の木の類は三千年、「バオバーブ」と云ふ木は六千年經たものと認められるのがあると云ひます。此等は人の壽命に較べれば非常に長壽と謂はなければなりませぬが、然し早晩朽ち果ることは明かであります。それで多細胞の生物は何うしても遂に死を免れぬものと決定つたやうであります。

所が學者と云ふものは執つこいもので、此れでもまだ承知しない。高等植物では插木とか接木とか云ふことが出來る、卽ち木の若枝を切つてこれを地に插せば、それが一個の獨立した同じ植物として發育する。又若枝を切て他の木に接げば、それが臺木の一部となつて發育を續けると云ふ事實があるが、動物體にもこれを應用することは出來ないであらうか。大學者又は大賢人と云ふやうな世の中に何時までも活かして置きたい人が病氣に罹つて死にそうにつた時、又は老衰して最早間もなく死にそうになつた時に、年の若い白痴或は改善すべからざる不良少年の頭と切替へ、或は接替へると云ふ程の事は出來ないとしても、少なくとも身體の一部分を何處までも本のまゝに保存して生活を續けさせることは出來ない

ものであらうか、と云ふやうな問題を提出して、實際その實驗をした學者もあり、又現に今でもこれを行つて居る學者があります。これは或は成功するかも知れません、實際一部分成功しかけて居るのであります。雞冠を他の雞の頭に癒著けて見たり、牝鼠の卵巣を切除つてその代りに牡鼠の睾丸を腹の内に縫い著けたり、人體に於ても手術の上でこれに類似の事が行はれます。然しこれを二代三代と何處までも續行して、一つの器官或は組織を元の狀態で活かし續けることが出來るかと云ひますと、幾代も世代を重ねて斯樣な試驗を續けることは容易でありませんから、餘り確かなことは申されませんが、植物の方では、三代四代と續けることは出來ない、その插枝或は接枝の性質が變はつてしまふ、三代目は矢張初めのものから分けなければならぬのであります。それで植物に於ても死なぬと云ふことは出來ないのであります。

然るにもう一つこゝに死なぬ工夫をした人があります。と云ふのは鯉のやうな魚類の中にはカチ〳〵に氷つて仕舞ふが、その氷が解けると再び泳ぎ出して本の通りに生活を續けるものがあると云ふことは昔から屢〻言はれることである。又昆蟲のあるものも嚴寒の候には硬くなつて硝子のやうになつて仕舞ふが、死にません。次の夏には又盛に繁殖するのであります。斯樣な所から、これを一つ實驗的に行つて見ようと云ふので、多數の魚類を氷らして見た先生があります、然し氷を溶かしても一匹も活き返つたものはありませんでした。初めから人間を使つて實驗しなかつたから仕合でしたが、實はこの先生は、人間の生命も氷らして保存が出來さうなものだと考へたのであります。實に奇拔な考案で、人間が好い加減に年を取つたならば氷らして仕舞ふ、而して百年程經つたならばそろ〳〵と溶かしてもらつて、その間に世の中の進歩した有樣を暫く見物して、大概の所で又氷らしてもらう、斯樣にして一世紀每に目を醒すことにしたならば少なくとも三千年位は生命

を保存することが出來ようと云ふのであります。然し實際には行つて見た人もなく、又普通凍死したものでさへ蘇生しないので、折角のこの妙案も實現されぬ事になつて仕舞つたのは遺憾であります。

これに就ては色々面白いお話も御座いますが、先づ大體の所、單細胞の動物だけは、どうやら死なずに行くことが出來るやうですが、その他の動物並に人間は何うしても死を免かれることは出來ないのであります。

扠て又その死を免かれざる理由、卽ち死の原因に至つては矢張種々複雜なる內外の原因があり、尙ほ今日でも說明の出來ぬ點もありますが、一々これをお話することになりますと容易でありませんから、今回はこれは省略致しまして、兎に角個體の死解すべき內外の原因があつて死するものと致して置ます。

斯樣に一切の動物、從つて吾人人間も何れは死すべきものと定まれば、今日の衛生と云ふことゝこの死との間には如何なる關係が成立つかといふ、これが本題の眼目とした點でありました。

最初に申しました通り、今日の衛生法は決して人間の不死を期するものではありません。寧ろ最も良く死ぬるには如何にすべきか、言換へれば有ゆる內外の害惡を防ぎ、出來得るだけ健康を保ち、老年に至つて自然に所謂燭盡きて火の滅するが如く、死するともなく極めて安穩の死を遂げると云ふのが理想とする所であらうと思ひます。斯樣な死に樣は普通老衰に因る死或は自然的の死と稱し、所謂天壽を全うして目出度く往生を遂げたものと云はるゝ所であります。此の如き死に方は眞に眠るが如きもので殆ど苦痛も惱もありません、誠に樂なものであります。八十、九十或は百餘歲の高齡に達して眠るが如く死去する場合には本人も周圍の人々も遺憾なしとして滿足致しますが、然しこの老衰と云ふのは矢張一種の病氣と見做さなければなりません、解剖的にも到る處に變化がある、第一に血管が硬くなり、筋肉も彈力を失ひ、骨は脆くなる、腦も小さくなり、肺も

小さくなつて呼吸面が少なくなり、其他の肝臟、膵臟並に胃腸等も皆幾分か變化を呈して居ります。是に由て觀ると老衰に因て死去するのも眞の自然死とは謂はれない、矢張病死であります。それですから實際は年齡のみで老人とは申されません、五十歲の老人もありますが往々六十歲の壯年もあり稀には七十歲の青年もあるやうです。故に若し有ゆる衛生法が遺憾なく行はるゝに於ては前にも申す通り吾々は平均百歲の壽命を保つことは決して難くあるまいと思ひますが、何れにしても老衰老朽は免れません。

この老衰の原因に就ても種々の事があり、又能く分からぬ點もありますが、單細胞の動物が死なぬのに多細胞の動物、從つて人間も死ぬると云ふのは、單に身體外部の影響のみではない、身體を構成して居る細胞の間に分業が始まり、生存競爭が行はれる結果であるともいはれます。然るに茲に一つ又奇妙な事は、斯樣に身體を構成して居る細胞が一團づつ分業を始めた事が身體死解の原因のやうに思はれますが、翻つて考へて見ますと、恰もこの細胞の分業と云ふ事があつてこそ人間は死んでも差支ない事になつて居るのであります。それは何う云ふ譯かと云ひますと、この細胞の分業の結果として、固有の身體を構成して居る居附きの細胞、即ち早晩墓の内に葬らるべき細胞と、他の新しい身體を造り出すべき胚種細胞と云ふものが分かれたのでありまして、この胚種細胞が固有の身體の殆ど全部の性質をその小なる顯微鏡的の一身に擔つて、又元の身體と同樣の新しい二代目の身體となるのであります。故に高等の動物の身體は全然死滅すべきものではなく、死滅すべき身體細胞と何處までも活くべき生殖細胞とに別かれた譯であります、考へて見れば實に不思議な面白い仕組でありますが、抑も何うして斯樣な事になつて來たかと尋ねますと、生物學者の說では、この身體の死と云ふのも要するに一種の適應作用である即ち必ずしも初から死なねばならぬと云ふ運命のものではないが、種族全體の永久の發達進步、繁榮の

爲には、適當の年齢に至つて死するのが最も都合が好い、それで一方にはその生活を續けて行く所の胚種細胞を作り、これに依て子孫から子孫と代を繼いで、固有の身體だけは相當の務を盡して適當の年齢に至れば生活を廢すことになつたのであると解釋するのであります。これが先づ最も當を得た説明と思はれます。

もう少し具體的にこのことを御話致すならば、人間が若し死なぬものとしましたならば如何でありませう。この地球の面積には限りがある、產物にも限りがある、そこに以ていつて人間が無限に繁殖する、而して死ぬものがないと致しますと、假令五十歳以後は子を生まぬものとしましても、忽ち地球上の產物は不足を告ぐるに至るに相違ない。マルサスと云ふ人は、今日の狀態でも、この割合で人間が繁殖して行けば餘り遠からずして地球は人間を養ふだけの食物の供給が出來なくなると云ふて大に世を驚かした事がある位ですから、實際死ぬものが無くなつて殖える一方とすれば斯樣な時期の早晩來ることは必定であります。一度そうなつた日には如何でありませう。昔は少し大きい饑饉があつても實に慘憺たる有樣を呈したのでありますが、玆に想像する場合の如きは地球上の有ゆる產物を盡しても最早全人類の飢を凌ぐことが出來なくなるのでありますから、必ず人間同志互に相屠るやうになるに違ひない、全く餓鬼世界となり、大修羅場とならざるを得ない。又假令斯樣に繁殖はしないとしましても、人が皆百歳或は二百歳までも活きるとしたならば如何でありませう。世は忽ち老人世界と化し、强大なる頑固な元老院となり、如何に活動的、進歩的の靑年の企劃も悉く壓倒され、進歩も發達もない世の中となつて仕舞ふでありませう。

斯う考へて來ますと、人間の死と云ふものは實に大切なものである、必要な事であることが分ります。是に於て好い加減の年齢で固有の身體は生活を罷めその代りに生殖細胞が新に芽を出して生存して行く

と云ふことは全く最善の適應現象と謂はなければなりません。

故に吾々はこの自然の大法則を納得し、益々衛生を重じて出來得るだけ健康を進め、無智の爲め又は不德の爲に身神を害することなく、眞に自然的の大往生を遂げると共に、將來の子孫に於て益々完全なる發達を成すやうに祈らなければなりません。

甚だ散漫冗長の御話でありましたが、少なくとも是で以て死と衛生とは矛盾した方向を取つて居るものでない、死の必要なる事、從つて衛生、特に生殖衛生の大切なる事等が朧氣にも御分かりになつたことゝ存じます。

糖尿病の話（其二）

醫學士　篠原昌治

糖尿病の治療法

何れの病氣でも之れを治療するには單に醫藥を服用すると云ふことだけて其目的を達するものではなく、藥劑以外の治療法にも重きを措かねばならぬと云ふことは今更申上げる迄もないことであります、けれど殊に此糖尿病に於きましては、古來種々なる藥劑が用ゐられて居りますけれど、まだこれなれば確に此病氣を治癒すことが出來ると云ふ程の妙藥かないばかりでなく、此藥ならば確に效驗があると云ふだけの藥劑とても發見せられて居りませんから、此病氣の治療法としては、主として藥劑以外の療法即ち養生法による外はありません。其故糖尿病の治療の際に、若しも此養生法に就て一歩を誤りますれば、患者は非常に苦しい思ひを致しまして、殊に澤山の費用を要するにも係らず、病氣は段々に重くなりゆくことがありますけれども、其反對に養生法さへ適當に行はれますれば、患者自身にはさしたる苦痛とてもなく、多額の費用をも要せずして病氣は比較的速に治癒すことか出來るものでありますから、此病氣ほど養生法の大切なものはないかと存じ

ます、而して糖尿病の養生法は種々ありますけれど、其内で尤大切なるものは食餌療法でありまして、此患者のある御邸の御臺處とは特に深き關係を有するものであります。

第一　糖尿病の食餌療法

糖尿病の養生法の中で尤大切なるものを食餌療法と致します、今茲に其食餌療法を申上げる以前に一寸御話して置かねばならぬことは、第一吾々の食料品は如何なる成分より出來て居るものであるかと云ふことゝ、第二糖尿病の際には、多量の糖分が尿中に出て來るものであるが、其糖分は何處より來るものかと云ふ二つの問題であります。

吾人の食料品として用ふるものは、千差萬別其種類極めて多くして、其形狀、硬軟、色彩、香氣及び味感等に於ても大に異つて居りますけれど、之を化學的に分析してみますれば、凡ての食料品は主として水分、蛋白質、脂肪、含水炭素及び極めて小量の纖維素、鑛物質等より成立つて居りまして、斯る食料品が人間の體內に入りますれば、口腔、胃及び腸に於て消化の作用を受けまして、此等の物質に分解せられて人體の榮養に必要なる物質を供給するものであります。而して食物の種類によつて此等の物質の含有量は非常に異つて居りますばかりでなく、一つの食料品の內に、此等のものを全部含んで居るものもありますけれど、唯其內の一二を有するに止まるものもあります、例へば肉類の如きは多量の蛋白質と脂肪を含んで居りますけれど、殆んと含水炭素を含むことなく、穀物は之に反して尤多量に含水炭素を含み蛋白質之に次ぎ脂肪は一般に極めて小量を有するのみであります。而して人體の榮養上尤大切なるものは蛋白質、脂肪、含水炭素でありまして、此三者の含有量の多少及び其配合等によりまして其食物の榮養價も定まるものであります。糖尿病の治療には各種食料品の蛋白質、脂肪、含水炭素の分量を知ることは尤大切なことでありますから、何時か此食料分析表も御目に懸けたいと存じて居

ります、以前より度々申上げました通り、糖尿病の際には、尿中に多量の糖分が出て來るものでありますが、其糖分は何れより來るものであるかと云ふに、これは主として食物中の含水炭素より來るものでありまして、多くの糖尿病患者に於きましては、尿中に出て來る糖の分量は、食物中の含水炭素の量に比例して增減するものであります、其故多くの場合に於ては、糖尿病患者に一定時日の間全く含水炭素を含んで居ない食物を與へますれば、尿中の糖分を全く消失せしむることが出來るものであります、元來健康の人でありますれば、食物として攝取しました含水炭素より糖分が出來ましても、其が體内で炭酸と水とに分解しまして、糖のまゝで尿中に出て來ることはありませんけれど、糖尿病患者は食物と共に攝取しました糖分や、含水炭素より出來ました糖分を、體内で炭酸と水とに分解する能力が減少して居りますから、自然糖のまゝで尿中に出て來るものであります、然し糖尿病患者でも糖の酸化力は全くなくなつて居るものではありません、それは糖尿病の程度によつて異つて居りまして、輕症の時には攝取せる糖の大部分は酸化しまして、唯其一部分が糖のまゝで尿の中に出て來るのみであります、けれど重症糖尿病では攝取せる糖の大部分が變化せずして其儘尿中に出て來るものであります、而して各各の糖尿病の場合に於て糖を酸化し得る能力を其患者の含水炭素に對する耐抗力と唱へます。

糖尿病の食餌療法を行ふに當りましては、先づ食物中の含水炭素を出來るだけ減少しまして尿中に糖分が出ない樣にすることであります、斯く食物を制限することによりまして、尿中に糖分が出ない樣に致して居りますればその内に患者は體内に於て糖分を酸化する能力を恢復しまして、小量の含水炭素を與へましても糖のまゝで尿中に出て來ることはない樣になるものであります、そうなれば漸次小量つゝ含水炭素の分量を增加しまして、遂には普通の食物を

與へましても尿中に糖分が出ない様にすると云ふことが此治療法の大目的であります。

然し玆に注意すべきことは、此食物中の含水炭素の量を減じて、尿中に糖分が出ない様にすると云ふことは、尤大切なことではありますけれど、糖尿病の治療に際して、唯尿中の糖分をなくすると云ふことのみを考へて其他の症狀を省みないと云ふ様なことをしてはなりません、即ち此食餌療法は常に患者の全身の狀態を顧慮して行はなければならないものでありまして、元來此病氣は少々糖分が出て居りましても患者の身體が丈夫でさへあれば左程心配することもありませんけれども、若し身體が段々に衰弱すればたとへ尿中に糖分は出なくとも大に注意せねばなりません。

糖尿病を治療するには、先づ患者の含水炭素に對する耐抗力をきめる必要があります、即ち何程迄の含水炭素を與へても其れを體内で消費することが出來て、糖として其儘尿中に出て來ることがないかと云ふ程度をきめるのであります、此含水炭素に對する耐抗力は各患者によつて大に異つて居ります、のみならず又同じ患者でありましても、其時期によつて著しき差異あるものであります、而して此含水炭素に對する耐抗力をきめるには、順序として其糖尿病が輕症であるか、又は重症であるかと云ふことをきめる必要があります、即ち先づ含水炭素を殆んど含んで居ない食物例へば獸肉、鳥肉、魚類、鷄卵、バタの様なものゝみを與へましてそれで尿中の糖分か全くなくなるか否かと云ふことをみるのであります、斯る食物を與ふることによりまして直に尿中の糖分がなくなりますれば輕症でありまして、若し又全く含水炭素を有せざる食物を與へましても、尿中の糖分がなくならなければ重症糖尿病であります。

幸にして糖尿病が輕症でありまして、含水炭素を含まざる食物を與ふることによつて、尿中の糖分をなくすることが出來ましたならば、其際試みに少量の含水炭素を與へます、若しそれでも尿中に糖分が

出なければ、又更に少量の含水炭素を增加して與へます、此際含水炭素の量を多くすることが出來ればそれだけ糖尿病は輕症であると云ふことになります、斯くして一日中に何程迄の含水炭素を與へても尿中に糖分が出ないで、若し少しでも其以上を與ふれば直樣糖分が出て來ると云ふ程度をきめるのであります、これが卽ち其患者の含水炭素に對する耐抗力と云ふものであります。

既に含水炭素に對する耐抗力がきまりますれば、其が許す程度に含水炭素を有する食物を每日與ふるのであります、然し其食物の種類や調理法は種々に變更して、成るべく美味しく喰べさせねばならぬと云ふことは申迄もないことであります、斯る食餌療法を長く續けて居りまして、從て尿中に糖分の出ないことが長く續きますれば、多くの場合に於きましては、其の內漸次病勢が輕快に向ひまして、其よりも多量の含水炭素を與へましても尿中に糖分が出ない樣になります、それを其患者の含水炭素に對する耐抗力が增進したと申ます、そうなれば又少しづゝ含水炭素の量を增加して行くのであります、斯る養生法を續けて居る內には多量の含水炭素を與へても尿中に糖分が出ない樣になりまして、遂には再び普通の食物を喰べることが出來る樣になることがあります、これが卽ち此療法に於ける望むところの結果でありまして、糖尿病食餌療法の大目的とするところであります。

それでは糖尿病の際には如何なる種類の食物を與ふればよきものであるか、又如何なる食物は與へてならぬかと申ますにそれには先づ食物を大體左の三種類に區別致します。

第一類　含水炭素を全く含まざるか、又は極めて其少量を含有するものでありまして、糖尿病患者に與へて差支なきもの。

第二類　少量の含水炭素を含むものでありまして、或程度迄は糖尿病患者に與へて差支なきもの。

第三類　多量の含水炭素を有するものでありまし

て、糖尿病に與ふるに尤も都合のよくない食物であります、而して其量の増減によりまして尿中の糖量に大なる關係を有するものであります。

而して吾人が日常用ふる食料品の內で如何なるものが何れの種類に屬するかと申ますれば第一類としては。

獸肉、鳥肉、魚肉、貝類、バタ、鷄卵、豆腐、青菜、未熟豆類等。

であります。

第二類に屬するものは、豆類、蔬菜類、果實類其他でありまして、其範圍ひろく從て含水炭素の量に於ても大に差異がありますから便利の爲に更に之を甲乙二種に別ちます。

甲種卽ち含水炭素の量比較的少きもの

豆類、落花生、納豆、豆腐粕、湯葉、白味噌、醬油等、蔬菜類、大根、蕪菁、胡羅蔔、蓮根、靑芋、やまいも、菊芋、つくねいも、葱、韮、うど、芥、蕨、蕗、筍、南瓜、西瓜、胡瓜、茄子等。蒟蒻、胡麻、松茸、澤庵漬。

果實類、梨、林檎、桃、苺子、胡桃、櫻桃、枇杷等。

乙種卽ち含水炭素の量比較的多きもの

豆類、大豆、小豆、豌豆、蠶豆、隱元豆、豇豆、刀豆、赤味噌等。

蔬菜類、午蒡、甘藷、馬鈴薯、やつがしら、百合、慈姑、芋莖、乾瓢、椎茸等。

果實類、芭蕉、葡萄、栗、椎、銀杏、とちの實等。

海草類。

であります。

第三類に屬するものは

米、大麥、小麥、麵麭、燕麥、粟、黍、玉蜀黍、蕎麥、饂飩、索麵等。

であります。

飮料としましては、牛乳、諸種の鑛泉水及び少量の葡萄酒及び日本酒等は與へて差支ありませんけれど、麥酒及び糖分を含有する諸種の人造飮料は禁じ

なければなりません。其他糖尿病の際に絶對に禁止しなければならぬものは砂糖及び甘き菓子等であります。

然しこれは唯大體のことを申上げましたゞけで凡ての食料品は各々其含水炭素の量も又其滋養價も相違して居りますから、其等に就て委しいことが知りたいと思召す方は食料分析表を御覽になりますれば一目瞭然とよく御分りになります。

此三種類の食物の中で第一類に屬するものは、前にも申上げました通り全く含水炭素を含んで居ないか、又は極めて少量に含有するのみでありますから、何程澤山與へましても差支ありません、第二類に屬するものは一般に含水炭素の量が少いから輕症糖尿病の際には殆んど制限なしに與へて差支ありません、けれども若し糖尿病が重症である場合に於きましては此第二類殊に其乙種に屬するものは一程度迄制限する必要を生じます、第三類に屬するものは多量の含水炭素を含んで居りますから尿の中の糖排出量に尤も密接なる關係を有するものであります其故常に注意して病症の輕重によつて增減せねばなりません。

爰に糖尿病患者の御膳立を致しますには、先づ第一類及び第二類に屬する食物を患者の嗜好及び食慾に應じて適當の分量を與へまして、之に第三類の食物を患者の病者の輕重に應じて尿中に糖分が出て來ない程度に與ふるのであります。

以上申上げましたところが糖尿病の普通食餌療法の大體でありまして、これは一見頗る簡單の事の樣に思はれますけれど之を實地に行ふに當りましては種種なる困難に遭遇するものであります、卽ち糖尿病食餌は普通の食事とは甚しく其性質を異にして居りますから、患者は之を喰べることを好みません又辛抱して喰べるとしましても斯る食事では患者は常に空腹を感じて滿足することが出來兼ねます、然のみならず常に斯る食事を調製するには多額の費用を要するものであります、其故此際如何にせば患者に甚

しく苦痛を感ぜしむることもなく、又經濟上多大の費用を要することなしに調製することが出來るかと云ふことに就て申上げたいと思ひます。

心臓と血液循環（二）

莊司秋次郎

心臓及び血管に關する解剖

レンチエン線と云ふものが發見されまして以來、生きて居る人の骨骼を見ることが出來るやうになりましたが、この方法で以て吾々の血管の分れ方も略ぼ觀察することが出來ますのみならず、これを寫眞に撮ることも出來るのであります。これで大體何んなことが觀察されるでありませうか。

胸の前面の中央の所に胸骨と云ふ一本の骨が縦に在りますが、心臓は胸廓の内に於て大半この骨よりも左の方に在ります、而して身體の有ゆる部分に向つて革嚢のやうな管を出して居る、その心臓に近い所では大凡拇指位の太さがありますが遂には細い絲の如き管となります、所謂血管であります、その中の何れが心臓より内容を運び出し、何れが輸入するかと云ふことは後ほどに御話致すことゝしまして、先づこの大血管は何う云ふ風に分岐れて行くかと云ふことを御話致します。

（一）解剖學上で大動脈と稱する所の一番太い血管は心臓の左の部分から發しまして、脊柱に對して弓形に後の方に曲り、これから頭と上肢に對して各二本づゝ太い血管の幹を發します、その右の方の一對は間もなく枝をさしますが、始めは暫時尚ほ短かい共同の幹になつて居ります。この第一の大きな枝は一方は頭の方に行き他の一方は上肢の方へ行つて居ります。大きな幹の左の方の一對は、各々前に申しました大動脈の弓形の部分から發しまして左側の頭と左の上肢へ行つて居ります。

（二）大動脈の直接の續きは偉大な太い血管になつて居りまして、胸椎に沿ふて腹腔に降り、それから骨

盤の後部に於て二本の太い枝に分かれ、その一本は左の脚に、一本は右の脚に下ります。斯様に腹腔内を通過致します途中で、腹部大動脈からは種々の側枝を出します、卽ち腹腔内に在る所の種々の臟器に到る血管でありまして、その主なるものは胃及び腸、腎臟、脾臟、肝臟並に生殖器に行くものでありますが胸腔を通過する間にも已に食道、氣管その他の組織に行く小さな血管が分かれまして、心臟自身は大動脈の始の部分から榮養枝を送られて、それが心臟の内に入込むで居ります。

この主なる血管の幹及び枝は、恰も樹木の枝の如く漸次分かれに分かれて參りますが、その詳細の事はこゝには略しますけれども、然しこれは醫師にとつては非常に大切な事であります。

只今申しました大小の血管は、所謂動脈と云ふものでありまして、活きてゐる人間では脈を搏つ所の血管でありますが、この外に尚ほ他の血管の網が身體内に蔓つて居りまして、これも亦心臟から出て居るのであります。

全身の總ての動脈の大本たる大動脈の外に、矢張心臟から第二の大血管が出て居る、その太さも略ぼ大動脈に匹敵して居ります。この第二の大血管は心臟から出ますと間もなく二本の大きな枝に分かれまして、その一つは右の肺に、他の一つは左の肺に這入つて參ります、但しその道は頗る短かい、卽ち左右の肺臟は恰も心臟を挾むで居るやうになつて居るからであります。然るに他の一方に於ては又兩方の肺臟から可なり大い血管が心臟へ行つて居りまして、此の如く生活に非常に大切なる臟器は互に密接に連絡されて居ります。此事は又後に至て注意さるゝことゝ思ひます。

又よく觀察致しますと、身體内のその他の臟器も心臟と二重に連絡されて居ります。卽ち大きな動脈になりますと、大抵何れも一對の菲薄な血管を伴ふて居りまして、恰も船の通る河の左岸と右岸とに鐵道が走つて居るやうなものであります。この後の血管

も亦一種の輸送の途でありまして、動脈の内に出來た歸り荷を運ぶ道なのであります。今迄は心臟から遠くの方へ血管を追ふて參りましたが、今度は反對に、遠く隔つた部分から心臟の方に向つて血管を追究して見ますると、この歸り荷を運搬する所の血管は最初全身の極微細な枝から漸次太い枝に集りまして遂に太い幹と成つて心臟の右側に這入ります、これが即ち靜脈と稱するものでありまして、この幹の一つは頭、頸及び上肢の方から來るもの、第二は下肢及び腹部の内臟の方から來るものであります、この外に肝臟に固有の仕掛がありまするが、これは又後に至つて御話することに致します。

さて只今まで簡單ながら血液循環の極概略の所を申述べましたが、若しこれを屍體に於て觀察しますならば、少しも斯樣な働の具合は分かりません。實際非常に長い間分からずに居つた事柄でありました屍體に於きましては彼の動脈系統の始まりの部分、所謂大動脈と申します部分は何時も空になつて居ります。それで醫學者も他の研究家も、此等の脈管は空氣を全身に循らす爲のものであると云ふやうに考へて居りました、即ち空氣は肺から心臟に來て、こゝから動脈の方へ送出されるものと思ふたのであります。然るに傷をした場合に、動脈から血液が迸出すことを認めまして、そこで斯う說明致しました、即ち血液は何時も心臟の右側にだけあるのであるが、それが左の室の方にも漏れ出して、そこから空氣と混合して動脈の方へ來るのである、斯う說明したのであります、解剖學の大家のウエザールと云ふ先生は西曆一千五百十四年から一千五百六十四年まで存生した人でありますが、この先生すら動脈と云ふものは生氣の通路で、死んだ後にも血液の溜つてゐる脈管系統の部分――即ち靜脈――のみは血液の通路であると申して居つた位で、其後英國のハーベーと云ふ先生が初めて血液循環の大發見をしまして、動物に於ける心臟及び血液の運動に就て

と云ふ著述で以て眞實の事を解明致しましたが、種々の攻撃を受け、狂氣だとまで云はれたのでありました。

今日これに就て吾々の知つて居る事とても、矢張心臟の解剖的構造並びにその設備を承知した上でなければ一寸理解することが出來ないのであります。

兎に角(一)心臟の左の部分からは大動脈に依て總ての動脈が出て居り、これに由て血液が心臟より諸臟器に導かれる、但し肺臟には特別に一本の大きな血管が行つて居つて、それは心臟の右の部分から出て居ると云ふこと。それから(二)身體の總ての部分から他の血管系統が心臟へ歸つて來て、心臟の右半部に連なると云ふことだけは確かであります。この第一のものは動脈系統で第二のものは靜脈系統であります。

(以下次號)

育兒

太郎の生立

ドクトル　三田谷啓

こどもの生立を詳細に觀察することは學問上より見ても亦育てる人から見ても興味あるものである其觀察が精密であれば精密であるだけ有益である世には育兒日誌を造つてこれに記入して居る方も少くはありますまいが發表せられたものは從來甚だ稀である。

こどもの中わけて生後第一年には著しい發育を致すもので細かに觀察すると小兒の精神と身體との發育の模様がわかる、私は多くの人々が育兒日誌を造り他日これを整理して世に公にせられんことを望む。

右の趣旨に基いて太郎の生立を紹介いたします。これは獨逸國イェーナ市のハンナ、クエック、ウィンケルと云ふ婦人が一兒童につき生後一個年間の觀察を記述したものゝ概要である。これが皆さまの參考とならば私の目的は十分に達せ得られたのである。因に我邦のものは、醫學博士石川貞吉、岩内誠一氏等の有益なる業績あり。石川博士の分は生後一個年間の觀察を總括したもので、岩内氏のは育兒日誌である。

＊　＊　＊　＊

太郎の生立を書かれたのは丁度太郎が生れて後十五個月の時であつた。よく肥え太つて居たがそれでも中々よく運動する兒であつた。生れた時は痩せて居た。併し皺が寄つて居たと云ふ程ひどいことは無論なかつた。只手の平に深い皺があつた。

太郎の身長は五十一仙迷で、頭部の周圍は三十五仙迷、體重は六磅と二百二十瓦であつた。太郎は其後毎週體重を測つて貰つた。丁度一個年經た時には十六磅と二百二十瓦になつて居た。僅かの除外例を省いては太郎の體重は週から週に渉つて增した。最も多い時は三百二十五瓦、最も少い時は十瓦であつた。

太郎は一度もこれと言ふ程の病氣に罹つたことはなかつた。約一年經たときに風疹に罹り、後直ちに麻疹に罹つた。

麻疹が治して後は發育は殊に劇しかつた。一度嘔吐を兼ねた下痢症に罹つたけれど、これは少さいこどもにあり勝ちのことで、太郎もこのためにこれと云ふ障碍を受けずに治癒した。太郎に始めて歯の生え出たのは九個月の時で左側の下部の切歯であつた。それから間もなく第二の歯が生え出した。生後一個年の時には丁度四個の歯が生えて居た。

太郎が苦もなく坐り得たのは丁度生後二百六十日目のことである。立たうと試みたのは十二個月の時であつた。

九個月の間太郎は母の乳を吞んで居た。六個月の時

から一日に一回づつ「アルコホール」の含まぬ葡萄汁を得た。これは砂糖水で薄めたもので、太郎は好んで呑んだ。

七個月から午食の時に碎いた野菜又は煮林檎を食した。母の乳を離れて以來一日に四瓶づつ牛乳を呑んで居る。初めは其半分であつた朝は小さい「パン」の塊又は簡單な菓子。晝には稍多くの野菜を食べて粥や、粉類を取ることは稀である、夕方には果物を生で又は煮てあるのを食べ、「パン」も貰ふたのである。

太郎は出來るだけ外に連れ出して保育された。夏の頃は睡眠時を除く外掛け出しの處で遊ばされた。正午には姉妹と共に外に出し太陽浴をした。後に及びては十五分位又はそれ以下であつた。

これから太郎の生後十二個月の生立を各月にわけて述べて見やう。

＊　＊　＊　＊

第一個月

太郎は生れた時に元氣で泣いた。柔かな布片で其身體を蔽はれて初めて靜かになつた。これによつて見ると溫度の感覺はこの時既に存じて居たものと見える。之に反して手で其身體を觸れても尚ほ感じはなかつた。

上肢と下肢とは殆んど常に動かして居た。手は握つて居た。手を布片に觸れてつかまうとした。眼は多くは閉ぢて居た。音がしても別に之に對する反應はなかつた。

二日目に母の乳を呑み出した。眼はまだ閉ぢて居た。

太郎の泣き方はこれを形容するのに餘程六かしい。けれども生後第三日目には太郎の泣き方が餘程變つた事がわかつた。

太郎の目は生後第一日の時より餘程開いて來た。そして其開き方も大きくなつて來た。併し光線に對して羞明を感ずる度は強かつた。「ラムプ」を太郎の傍に持つて行くと自分の手を顏の方へ持つて行つてそして光を避けるやうにした。其後間もなく「ラムプ」

の光に堪え得るやうになつた。それから後には何か注意を惹くやうなものがあると眼を太く開けるやうになつた。外で何物か音がするとこれに反應するやうになつた。

太郎が生れて六日目及び七日目に人の聲を聞いて注意して居るのを見止めた。即ち牛の首にぶらさげた鈴の音や音調的な口笛を聞いた。十二日目には「ピアーノ」のアッコールド」を聞くやうに成つた。太郎の搖籃は「ピアーノ」の側に置いてあつた。太郎は頭を上げて音のする方へ眼を向けやうとした。即ち聽覺と顏は同時に働いたのである。

十七日目に太郎の父は太郎の前で一つの「メロディー」を歌つた。太郎は目を大きくして眉を顰めて活潑な輝く眼で微笑した。二十九日目には幽かな口笛の「メロディー」によつて音の方向へ耳を廻すのを見た。

最初太郎が笑つたのは生後十二日目の事である。口の側に皺と齶を作つた。何となく喜ばしさが太郎の顏に現れたのであつた。これは後に現はるゝゑがほと笑の始まりと見て差支はあるまい。然し經驗のある親達に聞いて見ると、それは笑ではないので、ただ顏面の一部の屈曲に過ぎぬと言ふ。然しそれでも笑ひの最初のものとして認めた方がよかろう。

太郎の生れて初めの月の中ばに太郎が愉快を感じることが他人によく解つた。例へば湯に入ると太郎は喜ぶ。其證據には湯から上げると太郎は泣いた。

太郎の動きたがる事は既に早く氣がついた。九日目に太郎は初めてこの試みをやつた。太郎をねかせると頭をあげるばかりでなく、足を盛に動かした。

太郎は八日目に父に抱かれて鏡の前に出された。太郎は自分の姿を一寸見た。十一日目に再び鏡の前に持つて行かれた時には、大きな眼をしてこれを見た同じ日に又鏡の側へいつた時に、太郎は大きな眼をして父を見た。其翌日に鏡に映る姿を驚いて眺め、手を以てこれを捕へんとした。其樣が鏡の中の姿に近寄りたい樣に見えた。

十三日目に太郎は大きな眼を開けて母を眺めて居るのが解つた。面白い事には太郎が母の側に來ると乳を吸ふ運動をやつた。太郎の嗅覺は父と母とを區別するほどに進んだものと思はしめる程であつた。實際太郎が嗅覺を有するかを檢査する爲めに、丁度十一日目に母の乳を飲んで居る時に「ケルン」水（Eau de cologne）をかゞせた。すると太郎は頭をあげて眼をあけた。そして眉を顰め、鼻をそむけた。それから數秒の後に又乳を吸ひ初めた。けれども又二回三回と鼻をもちあげた。

十五日目に又新らしい試驗をして見た。太郎の父は純「アルコホール」の二三滴を指に塗つて、太郎が乳を飲んで居る時に、太郎の鼻の前にそつと持つていつた。すると太郎は母の乳から離れて鼻を高くし眼を開き眉を顰めた。

雜音に對する太郎の敏捷さ加減は生後二十日に於て既に見ることが出來た。卽ち室の戸を俄かにあけると、太郎は吃驚し、且つ身體が少し振ふのを見た。

二十九日目には搖籠に乘つて居る時に一寸動かすと吃驚した。これに反して興味のある事は開いて居る太郎の眼の上に指を持つて來ても反應が現れなかつた。三十日になつてもやはり同樣であつた。

太郎の泣き方は初めに比べると聲が嗄れて來た。十五日目には太郎が泣くと太郎の眼から涙が盛んに出だした。

第二個月

第二ケ月目には湯に入ると太郎は喜んで盛に笑ひ出した。

三十六日目に朝五時過ぎに三時間ほど目さめて居たが規則正しい發音をした、其聲は丁度「エッヒ」、「エム」、「エイ」、のやうに聞えたそれが強くなり弱くなつた。同じ日の午後に新らしい音が出た。それは「ホ」ときこえた。舌を以て音を發したと思ふのは初めて四十五日目であつた。四十八日目には新らしい音の「オーヒィ」と云ふ音が聞きとれた。五十三日目には「エョール」と云ふ聲がきこえた。

此の「エョール」の聲は今も時々きくところで色々の言葉と結びついて現れる。五十七日目には活潑な聲でエーグー〳〵と泣いた。六十日目には又新らしい聲が出た。「エー」、「エール」、「ールョー」。

其他太郎はどんな發育をしたかと云ふと、三十四日目にこんな事があつた。紐につるした時計をゆるやかに左と右に振ると、太郎はこれを見て眼を時計の行くに從つて動かした。四十日目に太郎は一番上の姉の姿を見つむるやうになつた。それより八日經てから太郎の眼は天井の一點を見つむる樣になつた。太郎の姿が鏡に映るとかれはそれを見るとたんに近寄らうとして大きな眼を開けて凝視するのであつた丁度四十三日目の時に鏡の前で驚いた顏をして大きな口を開けた。五十九日目には鏡の姿を見て別にこれと云ふ表情を現さなかつた。

太郎の側にあるものが太郎の注意を惹き起したものは多くは人間であつた。一度太郎の父は搖籠の後に立つて居た。太郎は眼を上に向けるばかりでなく全部の頭を動かした。「ピアーノ」の聲が太郎に印象することは著しいものであつた。太郎は頭を動かして其聲の出る方の耳を以てきくやうに見えた。太郎が眠つた間に聽覺を檢査しやうと思つて、太郎の父は太郎の生後三十七日目に搖籠から一「メートル」隔てて手を打つて見た。太郎は吃驚して身體を動かし兩手をあちこちに動かした。三十八日に一寸強い雷がなつた。其時にもやはり太郎は驚いた。

太郎の聽覺は右申した如く鋭敏で、四十八日目には紙を揉み、五十日目には本を閉ぢても身體を振はせる程であつた。丁度三十七日目に冷たい水を使かつたけれども太郎は別にこれと云ふ印象を受けなかつた。指で鼻の尖を觸れて見ると眼瞼の運動をした。四十日目に太郎は父の顏が俄かに自分の顏に近づくに及んで、初めて眼を閉ぢた。これは六回反復された。しかし眼の前に一本の指を持つて來ても太郎は眼を閉ぢなかつた。六十日目に足の裏をこそばして見たら足の趾を曲げた。

太郎は生後第一ケ月よりも餘程多く笑ふやうになつた。時には著しい笑ひ方をした。三十七日目には太郎の父は太郎と戯れた。父は赤い上布團を太郎の顔にのせた。ところが太郎はこれを取りのけた。太郎は笑つて、又「ホー」と云つた。太郎の父は太郎と遊び續けた、そして又太郎は「ホー」といつた。こんな事をして六回も繰返した四十三日目に小い赤い「ハンカチ」を持つて來て顔の前にひら／＼させたところが、太郎は笑つた。五十日になつて大人が笑ふやうな笑ひ方をした。この時に舌があちこちに動いて居るのを見、且つ舌が口から出るのを見た。（以下次號）

乳兒榮養看護の要則（承前）

莊司秋次郎

九箇月前及び夏は離乳せざる事

（十一）離乳は成るべく九箇月前にはせず、又夏の直前後及び夏の間は離乳してはいけません。一番宜しいのは、最初晝時に脂肪分の少ない肉汁で煮た粥及び少量の能く軟かに煮砕いた野菜を與へまして、その代りに晝時の哺乳を廢めるのであります。小兒がこの食物に慣れた後には、段々一杯或は一盤の煮た牛乳を以て一回づゝの哺乳に代へて参ります。それに少しづゝ上等の「ビスケット」を與へて宜しい。離乳は決して急にすることなく、四週間乃至五週間或は一二個月位の間に徐々に離乳するやうに致さねばなりません。

若し二三週間或は二三個月の後に既に離乳しなければならぬやうな場合には極めて徐々に十分注意して行はなければなりません。斯様な幼兒の爲には、牛乳を與へますにも、人工榮養の條下（十五）に述ぶる如き稀釋方にして與へなければなりません。

牛乳で榮養するのは止むを得ざる場合の非常手段なる事

（十二）初生兒の人工榮養は常に不安心な非常手段であります。元來強い性質の小兒でも人工榮養では大

抵發育が惡く、病氣になり又不機嫌になり易いものであります。人工榮養の小兒の一部は數週の後に下痢或は痙攣或は瘦削の下に死亡し、一部分は非常に注意深い看護に依て漸次恢復致しますが、それでも多くは英吉利斯病と云ふやうなクタ〳〵病に罹り、一生涯薄弱で病身者になります。

尙ほ牛乳で榮養するのは頗る面倒で且つ費用がかゝります、それ故貧窮の家族では、小兒のよく發育するやうに、之を實行することは甚困難なことであります。

人工榮養品は母乳の代用とはならざる事

(十三)母乳の代用品としては一つもありません。これは母乳の代用品であると稱して、自家製造の榮養品(小兒粉、牛乳製劑等)を廣告する工業家或は藥屋は自ら欺き又母を欺くものでありまして、これが爲に非常に多數の小兒が病氣になり或は死亡するのであります。人工的の榮養劑は止むを得ざる際に醫師の處方に從つて使用すべきものであります。

淸潔新鮮の牛乳と雖尙ほ母乳の不良なる代用品たる事

(十四)母乳を缺く場合に、小兒の爲に最も良い、而かも尙ほ甚不完全で不自然な榮養物は牛乳であります。然しこれも特に夏分は十分信用の出來る牛乳店から取らなければなりません、最も良いのは直接に淸潔な牧場から買ふことであります。牛乳は極新鮮なものでないと容易に腐敗し、これが爲に重症の吐瀉病を起します。家では牛乳は直ちに二三分間煮立て、その後よく蓋をした同じ壺の內で速に冷却さなければなりません。これには多量の冷水に漬けて置て、度々水を換へるのが一番宜しい斯樣にして用ふる時まで冷却して置くのであります。

若し山羊の乳を得ることが出來、特に夏季に於て每日數回新鮮な乳を得ることが出來れば、これは種々の點から牛乳よりは優つて居ります。その取扱方及び用法は牛乳と同樣であります。

小兒が病氣にならぬやうに致しますのには、牛乳壺、

罎、掃除する刷毛、護謨の吸口等總て極めて清潔に保つことが肝要であります。牛乳の殘渣の乾いて固まりついたのは、之を除くことはなか〱困難である、故に使用後は直に總ての道具を洗ひ、每日一回づゝ煮るやうに致します。

（以下次號）

家庭衛生

醫用上の石鹼

石鹼の消費高で以て文明の程度が分かると申しますが、確かに理由のある判斷に相違ありません。然しこれに就ては尙は眞に清潔を欲し、能くその目的を解して居るかどうかを顧みる必要があります。

石鹼は單に皮膚の垢を落して美しく見せる目的だけのものではありません。皮膚の表面に巣くはんとする傳染性及び非傳染性の有害物を除かなければならぬのであります。

そこで石鹼は何うして造られたものかと尋ねますと、案外御承知のない方が多い。一口に言へば脂肪或は油を「カリ」或は「ナトロン」滷汁又はその炭酸鹽と煮れば石鹼が出來るのでありまして、その「ナトロン」を應用したものは「ナトロン」石鹼「カリ」を應用したものは「カリ」石鹼と云ふのであります。「ナトロン」石鹼は硬い。

製造品に對しては先づ三つの要求が起ります。第一には石鹼は多量の脂肪酸「カリ」を（七〇プロセント以上）含むでゐなければなりません。第二に中性で少しも遊離の「カリ」を含むで居らぬこと。第三には少しも他の成分を混じて居らぬことであります。これは先づ純粹の石鹼でありますが、市中に販賣されて居る石鹼には「グリセリン」その他種々の物が混じてあります。尙ほこの外に不純と云ふわけではないが、脂肪の餘分に含まれて居る石鹼があります。卽ち「アルカリ」で脂肪酸に飽和するときに剩まつた脂肪を

混じて居るのであります。勿論斯様な石鹼は普通の石鹼よりも之を用ひて皮膚の乾燥したり或は荒れたりすることは少ないのであります。

石鹼は一寸見たゞけでは分かりませんが、非常に種種な評判をされるものであります。それは其の筈で脂肪の少ない乾いた皮膚の人、皮膚の角質層の薄い人、又皮膚の一體に柔かい人は餘り石鹼はいらず殊に緩和種類の石鹼が必要で實際心地よく感じますが、これと反對の皮膚の人は矢張り反對の石鹼がよいと云ふ事になります、即ち脂肪の分泌が多く、皮膚角質層が厚ければそれだけ石鹼の必要も多く、硬い柔かいなどは餘り構はぬ譯であります。實際上の觀察に於きましても、皮膚の色素が多く、色の黒い人の方が脂肪が多く角質層も厚く、色の白い皮膚の柔かい人は薄い乾燥した皮膚を持つて居るのが普通のやうであります。それで或人は皮膚の艶をよく保つためには澤山石鹼をつけて洗はなければならず、又他の人は餘り石鹼をつかつては却てよくないと云ふやうな事が起つて來るのであります。

一番觸りの柔かいのは脂肪の多い中性の石鹼でありまして、その次は脂肪の餘つてゐない普通の石鹼で、「アルカリ」性の度に由つて作用の強い弱いがあります。

然し單に石鹼の性質ばかりでなく、その使用法如何に由つても種々の相違が起つてまゐります。たとへば或人は非常に儉約な石鹼の使ひ方をしますが、或人は非常に泡を立て何を洗ふのかと思ふほど石鹼を溶き、又或人は二三分間で洗つて仕舞ふかと思へば他の人は十分間も時間をかけて洗ふ、或人は水で石鹼を使ふかと思へば他の人は熱い湯で使ふと云ふやうな相違があります。それから又金の點もありまして上等の石鹼の値段は主として香ひと廣告の爲に高價になるのであります。然しこの事に就ては姑く措きまして概してよい石鹼はどんな風かと申しますさ使用した後で皮膚が甚だしく乾燥したやうな荒くなつたやうな感じは致しません、かやうな感じのある

のは遊離した「アルカリ」の多い石鹼であります。それからよく形狀を保たなければなりません、卽ちボロ〳〵になつたり碎けたりするものではいけません、周圍から段々に耗つて終になるまで同一の性質同一のつる〳〵を保つてゐなければなりません。

次に醫用上から石鹼に就いて申しますと大體三つの要點があります、第一は脂肪を除く目的に用ゐられ、次に角質層を溶解し、それから寄生物を追ひ拂ふ目的を有つて居ります。

石鹼を醫用に供する方法は通常次の原則に因るのであります。

一　單純に洗ふ爲に用ゐます、これには微溫湯を以て泡を立た石鹼を皮膚に塗つて、直に又水で洗ひ落すのであります。

二　泡を立た石鹼で以て二三分間皮膚を被ふて置き、それから「ガーゼ」で以て摩り乾かしてしまふのであります、これは泡の殆ど半分は皮膚の內に這入てしまひます、その中に藥が含れて居ればその藥も這入る譯であります。

三　石鹼の泡を厚く塗つてそのまゝ乾かしてしまひます、これが最も強く作用いたします、これを更に強く作用かせやうと思へば

四　塗つた泡の上を水の透さぬ被ひを以て固定するのであります。

兎に角藥用石鹼は普通の軟膏よりも容易に且つ深く皮膚の內に侵入して吸收も容易で、從つて作用も強いと云ふ利益があり、値段も安く出來ます、只基礎劑としては純粹のよい脂肪のやうに一定しませんで種々の相違があるので不都合でありますが、然し又幾多の便利な點もあります。

形狀も或は固形にすることも出來れば、粉にする事も出來、水にする事も出來、軟膏のやうにする事も出來ますので種々に應用する事が出來、これに藥物を混じて種々な便宜があります。

昨今の八百屋物二三種

筍

筍は東洋獨特の食用品で西洋人は味を知りません。筍も竹の種類に依て大小硬軟各々異り、その味も多少の相異はありますが、最も食用に供せられるのは孟宗であります。孟宗は普通掘り立てのものを煮て食用に致しますが、味噌汁にも入れます。又種類に依ては鹽漬にもし、乾燥したものもあります。

筍を分析して見ますと、頗る多量に蛋白質を含むで居ります。然し植物中の蛋白質には眞の蛋白質と「アミード」化合物と稱せられるものとを含むで居りまして、この「アミード」化合物は矢張窒素化合物には相違ありませんが、普通の蛋白質ではありません筍の中に含まれて居るのは大部分この「アミード」化合物の方であります。筍は軟いと云ふても消化は決して宜いものとは申されません。然し味が良く、多少の蛋白と多量の鑛分を含むで居りますので、食品として差支ない、先づ結構のものと申して宜しいのであります。

土當歸

土當歸、又獨活とも書きます、俗に「ウド」の大木と申しますが、野生の「ウド」は四五尺位伸びます。普通食用とするのは獨活の萌しで一尺程ありまして頗る香氣の強いものである、矢張直接榮養となる蛋白ではありませんが可なり多量の蛋白類を含み、消化機を亢進させる作用があるやうであります。西洋料理に出る「アスパラガス」もこの一種で鹽うでにして、白「ソース」をかけたのは淡白で一寸味の好いものであります。

春菊

細く裂けた菊のやうな葉で、淡綠色を呈し、軟で、香氣が高いので、浸物として尊ばれます。凡て新鮮の野菜は新鮮な血液を造るに有益な成分を含むで居りますから、消化器の健全な人は遠慮なく

食用にして宜しい、食物は決して單に硬軟を論ずべきものでもなければ、蛋白の多少のみに由て優劣を判ずべきものでもありません。病人の食養は別でありますが、健康な人は何を食べても身體の益となるものであります。

抄録

兒童の間食

日本女子大學家政部に於て、兒童の間食として用ふべきものと、不適當なるものとを定めて、之を公にしたるが、卽ち左の如し。

(甲)間食として用ふべきもの

(イ)一歳以上の兒童

「ウエーファー」　園の露　切「ボール」　君が代　「ワインガービスケット」「ニレットビスケット」　衞生「ビスケット」

(ロ)二歳以上の兒童

「ジヤムボール」　うづ卷　花「ボール」　美味「ボール」　こうがい　衞生「ボール」　山楽紅　角形「ビスケット」　吉野おこし　「ビクトリヤサンドウイッチ」　「カステーラ」　「バナヽ」　かるやき

(ハ)三歳以上

玉子せんべい　菊の露　日本「クラッカー」　おこし　八ッ橋　老松　粟飴　燒松葉　かるやき　五家寶　卷煎餅　柿煎餅　いか煎餅　ひさご風船　あられ　「ビスケット」　甘食

(ニ)三歳以下に不適當のもの

生薑板　あるへい　きんか糖　赤れぢん棒　かりん糖　とひくち　飴ん棒　色こんぺい糖　都豆　豆板　茶つう　白れぢん棒　色らくがん　面おこし　そら豆甘納豆　こんぺい糖　胡麻ばん　「ドロップ」　紅梅燒けし落雁　雪つぶて羊羹　落花生せんべい　蜜柑玉

婦人と腰湯

醫學士川島右一述（讀賣）

婦人病のある者が、寒さに腰部の冷えを自覺するのは、當然の事で、病氣もなく健康で立働いて居る婦人でも、腰部の冷えを覺え、病氣に罹る事がある、されば寒い思ひをしたら、其の豫防法を講ずる事を忘れてはならぬ、腰部を冷さぬやう温にして置くのは、素より必要であるが、夫れと同時に鹽の腰湯をする事は、最も適當なる豫防法である、其方法は普通一杯の盥の湯へ、鹽を三合溶解する割合で宜しい、最も初めに鹽を熱い湯に溶いて、漸次に湯加減を試むやうにしないと鹽が十分に溶解しない、幷して之れは夜分就褥の際に行ふのが效驗が多い、此の腰湯は、全身浴よりも寧ろ腰部を温める效能が多いので、寒氣の爲めに腰部の冷えを覺え、夫れから膀胱に風邪をひいたやうな場合や、竝に此等の豫防法としては、特に鹽の腰湯を奬勵する。

體育十誡

甲府市の吉岡順作氏は、この程體育十誡を選みたり、左の如し。

一　新鮮ノ空氣ト日光ハ、生活上、無比ノ保護者タルコトヲ忘ルル勿レ

二　飲食物ノ含益成分ト、咀嚼トニ注意スルハ、生存上最良ノ自衛策タルコトヲ忘ルル勿レ

三　煩悶ト憂鬱ハ、諸病ノ誘引者トナル、精神修養ノ必要ナルコトヲ忘ルル勿レ

四　運動ト遊戯ハ、身體及精神ノ健全ヲ維持スル、原動力タルコトヲ忘ルル勿レ

五　安逸ト間食ハ、消化機能ヲ害ス、壽命ヲ短縮スル斧鉞タルコトヲ忘ルル勿レ

六　一定ノ休養ト安眠ハ、保健上須要ナリ、身神ノ良薬タルコトヲ忘ルル勿レ

七　皮膚ハ常ニ強練シ、抵抗力ヲ増進スベシ、人身ノ甲冑タラシムルコトヲ忘ルル勿レ

八　諸機能ヲ軟弱ナラシムルハ、城ヲ開キテ敵ヲ入ルルト同一ナルコトヲ忘ルル勿レ

九　疾病ハ間断ナク、來襲ノ機會ヲ窺ヒツツアリ、病毒ノ危険ナルコトヲ忘ルル勿レ

十　衛生ヲ忘ルル、勿レ、衛生ヲ忘ルルハ、生命ヲ忘ルルト異ナラザルコトヲ忘ルル、勿レ

雜報



○看護婦規則

去月十八日内務省中央衛生會にて決定せられたる看護婦規則は左の如し。

看護婦規則

第一條　本令に於て看護婦と稱するは公衆の需に應じ病者又は褥婦看護の業を爲す女子を謂ふ

第二條　看護婦たらんとするものは十八年以上にして左の資格を有し地方長官(東京府に於ては警視總監以下之に倣ふ)の免許を受くることを要す

一、看護婦試驗に合格したる者

二、地方長官の指定したる學校又は講習所を卒業したる者

地方長官は免許を與ふる時は看護婦免狀を下付す

第三條　精神病者、傳染性の疾患ある者又は素行不良と認むる者には免許を與へざるものとす

第四條　看護婦試驗は地方長官之を施行す

試驗科目左の如し

一、人體の構造及主要器官の機能、二看護方法、三衛生及傳染病大意、四消毒方法、五綳帶及治療器械取扱大意、六救急處置

第五條　一年以上看護の學術を修業したる者にあらざれば看護婦試驗を受くることを得す

第六條　看護婦は主治醫師の指示ありたる場合の外被看護者に對し治療器械を使用し又は藥品を授與し若は之が指示を爲すことを得ず但臨時救急の手當は此の限に在らず

第七條　看護婦其の住所を他の道府縣に移したるときは十日內に免狀を添へ後の住所地の地方長官に屆出べし

前項の場合に於て後の住所地の地方長官は其の旨を前の住所地の地方長官に通知すべし

第八條　看護婦免狀を毀損亡失したるときは其の事由を記し二十日內に住所地の地方長官に再下付を願出べし但毀損の場合には毀損したる免狀を添附すべし

族籍氏名に變更を生じ又は生年月日の訂正を要するときは其事由を記し二十日內に免狀を添へ地方長官に書換を願出べし

亡失したる免狀を發見したるときは直ちに之を地方長官に提出すべし

第九條　看護婦廢業したるときは二十日內に免狀を住所地の地方長官に返納すべし

看護婦三年以上其業を營まざるときは廢業したるものと看做す

看護婦死亡し又は失踪の宣告を受けたるときは戶籍法に依る屆出義務者より二十日內に免狀を返納すべし

第一項及第三項の場合に於て免狀を返納すること能はざるときは其の事由を屆出すべし

第十條　看護婦第三條に該當し又は業務に關し犯罪若は不正の行爲ありたるときは住所地の地方長官は期日を定めて其の業を停止し又は免許を取消し免狀を返納せしむることあるべし

本條の取消處分を受けたる者と雖も疾病治癒し又は改悛の情顯著なるときは再免許を與ふること得

第十一條　免許を受けずして看護の業を爲し若は停止中其の業を爲したる者又は第六條の規定に違反したる者は五拾圓以下の罰金に處す

第十二條　第七條第一項第八條又は第九條の規則に違背したる者は科料に處す

附　則

本令　大正年　月　日より之を施行す

本令施行前地方長官に於て與へたる免狀、免許狀、免許證は本令に依り下付したる看護婦免狀と看做す

本令施行の際現に地方廳に看護婦名簿に登錄を受け居る者は本令に依り受けたる者と看做し看護婦免狀を下付す

本令施行の際現に看護の業を爲す者にして本令施行後三月以內に願出づるときは地方長官は履歷を審査し試驗を要せず免許を與ふることを得

地方長官は第二條の資格を有せざる者に對し當分の內其の履歷を審査し看護の業を免許し准看護婦免狀を下付することを得

准看護婦及男子たる看護人に對しては本令の規定を準用す

金百八拾五圓六拾參錢　預ケ金利子
金參圓七拾八錢　雜收入

支出

一金千九百參拾壹圓參拾貳錢

內譯

金五百貳拾參圓五拾六錢　報酬
金壹圓參拾錢　備品費
金八百參拾五圓貳拾貳錢九厘　圖書及印刷費
金壹圓六拾八錢五厘　筆紙墨文具
金七拾參圓拾壹錢　通信運搬費
金百四拾圓參拾七錢　集會費
金五拾六圓七錢　雜費
金參百圓　借家料

收支差引殘

一金參千貳百六拾參圓五拾九錢七厘

內譯

金參千圓　三井銀行預金
金五拾壹圓六錢　東京貯蓄銀行京橋支店預金
金八拾參圓六拾九錢五厘　振替貯金
金五拾圓　借家敷金
金七拾八圓八拾四錢貳厘　手許有高

以上

○新潟支會入會者

○黑田てつ子紹介　通常會員　岡崎ふち子

○關やす子紹介　通常會員　奥山千代子
通常會員　關川よし子

○竹山れつ子紹介　通常會員　千田るい子

○轉居

●京橋區元數寄屋町三ノ四へ　山形いれ子
●四谷區東信濃町十六へ　宇野きよ子
●青山原宿二〇一へ　横井秀子
●麹町區飯田町二ノ四九長嶺方へ　本多貞子
●麻布區霞町六へ　川濱時子
●府下千駄谷町五四三へ　辻新次
●府下西大久保百人町六〇へ　青木すゞ子
●府下西大久保北裏一三へ　橋本よし子
●麻布區本村町一〇三へ　小松いさ子
●本郷區曙町一六へ　三浦とき子
●本郷區千駄木町六四へ　島田濱子
●麹町區三年町二有栖川宮邸內へ　武田かね子
●本郷區湯島新花町九七へ　大澤とよ子
●青森縣西津輕郡鰺澤町七ッ石へ　藤田千代子
●芝區三田四國町十六へ　酒井邦子
●麹町區三番町へ　高田てる子
●廣島市水主町二一五へ　仙田花子

私立大日本婦人衛生會役員氏名

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價

一冊 定價金貳拾錢 郵稅壹錢
三冊（三ケ月分） 前金郵稅共 金四拾五錢
十二冊（一ケ年分） 前金郵稅共 金壹圓八拾錢

廣告料

一頁六十二行 一行二十三字
壹頁 金五圓 半頁 金貳圓五拾錢
○特別廣告 壹頁金拾四圓 半頁金五圓
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行貳拾五錢

規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ケ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

大正四年四月二十二日印刷
大正四年四月二十五日發行

編輯者兼發行者 東京市本鄕區根津西須賀町九番地 莊司秋次郎
印刷者 東京市本鄕區駒込林町百七十二番地 田中増藏
印刷所 東京市本鄕區駒込林町百七十二番地 杏林舍

發行所 東京市麹町區富士見町二丁目三十二番地 私立大日本婦人衛生會事務所

賣捌所
東京市本鄕區龍岡町 吐鳳堂
同市銀座四丁目 東海堂
同市京橋區鈴屋町 良明堂
同市本鄕區本富士町 明文館
同市同區春木町 南江堂支店
京都市寺町二條南入町 若林茂一郎
東京市日本橋區吳服町 北隆館
同市神田區表神保町 東京堂
同市本鄕區本富士町 盛作堂
名古屋市榮町六丁目 丸善書店